江戸の情報屋が残した記録
―『藤岡屋日記』

神田御成道の広場で古本屋を営んでいた藤岡屋こと須藤由蔵の記録。彼はさまざまな情報を収集し記録に留めましたが、その一部を武家などに提供していたとされています。江戸の情報屋だったのです。

文化元年（1804）から明治元年（1868）に至る幕府政治関係の記録、開帳や芝居の評判、喧嘩や殺人・強盗などの事件などを編年体で書き留めており、幕末江戸社会の研究に欠かせない情報を提供してくれます。

この大部な記録の原本は、東京市史編さんのため150巻152冊に及ぶ写本が作成された直後、関東大震災で焼失しています。先駆的な編さん事業が史料保存に寄与した事例といえるでしょう。

『藤岡屋日記』第37
火元警戒の御触を住民に読み聞かせる
家主（大家）の様子。

『藤岡屋日記』第24
流行病を予言した上で、自らの画像を見た者は
その病を免れると言ったという人魚のすがた。
越後のアマビエが幕末の江戸では人魚に転換され、
こうした画像を売り捌く者がいたらしい。